7　信念の人、他力本願を究めた宗教哲学者

清沢満之（きよざわまんし）
（1863～1903／大浜）

1　神童と呼ばれた秀才の少年

清沢満之は、文久3年（1863）名古屋黒門町に父徳永永則、母タキの長男として生まれた。幼名は満之助と言った。身分の低い士族で、母は熱心な真宗の信者であった。家は貧しく、妹が生まれたために2歳まで祖母マツの家で養育された。

明治5年（1872）、第五義校（現 名古屋市立筒井小学校）に9歳で入学、11歳で卒業すると、愛知外国語学校に入学した。英語と数学が得意で、教授の英国人が演説に行くとき、通訳として連れていかれたくらい頭脳の鋭利と実直な態度で知られた。学校が廃校になり、明治10年（1877）、父の勧めで愛知県医学校に入学、家計の窮乏により、退学した。しかし、四書五経を習い、近隣の子供に英語を教えた。

2　東京大学予備門に入学

尾張の龍華空音を介し、近所の覚音寺、小川空惠らから「京都の本山が新しい育英事業を創め、寺門の子弟から格別の英才を募り、給費で学問させようとしている」と告げられ、母の勧めもあり、明治11年（1878）、東本願寺育英教校に入学した。25名の入学者の中でも満之は飛び抜けて優秀だった。休み時間にも三部経を読み、真面目な満之に対して「ビショップ（司教）」というあだ名が敬意を込め付けられた。

明治14年（1881）、育英校を廃し、英才を東京へ派遣しようということになり、満之は他の2人と共に東京大学予備門第二級生の編入試験を受け、1位で合格した。

3　首席の東大時代、宗教界に入る決意をする

物理学に関心を寄せるようになったが、本願寺の給費生であるため明治16年（1883）、20歳で東京大学文学部哲学科に入学した。哲学教授のフェノロサからヘーゲル哲学を学び、満之の宗教哲学の基礎が作られた。成績は常に首席を占め、尊敬された。24歳で卒業し、明治20年（1887）大学院に進んだ。傍ら第一高等学校でフランス史を教えたり、「哲学館」で心理学、論理学、純正哲学を講義した。一高の給料だけで40円あり、名古屋から両親を呼び、本郷に居を構えた。前途洋々の船出であった。

学者の道に進めば著名な学者になったはずであったが、「本山から学問をさせてもらって、今日に至った。恩を尽くさねば」と、宗教界に生きる決心をした。

4　25歳で中学校長に、満之の人生で唯一華やかな時期

明治21年（1888）、25歳で京都府立尋常中学校（後の京都府立洛北高等学校）の校長として赴任した。同年、大浜の西方寺の娘清沢やすと結婚した。満之をつなぎ止めておきたい宗門と、優秀な僧侶の養子を探していた西方寺との話し合いで進展したのだ。百円の高給（京都でも数える位）を取り、山高帽にフロックコート、口髭を蓄え、西洋たばこをくゆらせ、迎えの人力車で通勤した。満之の人生で唯一の華やかな時期であった。

5　生活を一変、禁欲生活

28歳のとき、大いに感ずるところあり、校長を友人に譲り、生活を一変させた。洋服も全て人にやり、妻子を故郷に帰し、頭を丸め、木綿の白衣に黒衣墨袈裟を着て、京の人々を驚かした。翌年母が亡くなり、忌中の精進からますます禁欲生活が激しくなり、ついには塩を断ち、煮炊きをやめ、そば粉を水で混ぜた物や松ヤニをなめて三食をすませた。人が生きるためのぎりぎりの可能性を実験する猛烈な禁欲生活であり、号を「骸骨」と名乗った。真宗大学寮で『宗教哲学骸骨』（英訳されシカゴの万国宗教会議で好評を得る）を講じ始めた頃である。

6　宗門改革と養病期間

明治27年（1894）1月29日、厳如（大谷光勝）の葬儀のため、皆頭を剃って夜中の寒中立ち続けた。その後京都に風邪が流行り、満之も体を壊したが、少しも休まず働いた。後に結核と診断され、友人の強い要請から垂水（現 神戸市）で養生した。

当時の東本願寺の金権体質に、満之らは、学校改革と同時に教界時言社を設立して寺務改革に取り組んだ。1年足らずで満之は垂水を引き払い、病を押して動いた。暁烏敏（あけがらすはや）らの学生も参加したが、改革はうまくいかなかった。しかし、満之はこの間死と生、自力と他力など宗教的思索を深めることが出来た。

7　西方寺に身を寄せる

明治31年（1898）、35歳の満之は西方寺に入った。位もなく、老実父を伴っていた。肺病で5尺に足らず、10貫に満たぬ貧相な満之は門徒からも受けが悪かった。説教をすれば難しいと皆帰る始末であった。輝かしい経歴は通用しなかった。

しかし、この人情の煩累は、満之の宗教的信念を確固たるものにしていった。日記「臘扇（ろうせん）記」を綴り、『阿含経』『エピクテタスの語録』『歎異抄』を読み、「自分とは何か、他力の力にまかせて、そのはからいのままに、今こうして生かされていることである。他力のおあたえを楽しもう」という悟りにも似た絶体他力の信念を確立していった。

8　上京、浩々洞（こうこうどう）の共同生活をおくり真宗大学学長になる

満之は翌年、新法主の進講のため上京せよとの命を受け、上京した。真宗大学（後の大谷大学）の東京移転にも尽力し、暁烏らの弟子と共に本郷森川町（現 東京都文京区）で自由と温かい「浩々洞」の共同生活を始めた。また、『精神界』という雑誌を発刊した。ここに満之の「精神主義運動」が展開されたのである。著名な哲学者西田幾多郎の思索にも影響を与えた。また、明治34年（1901）、満之は真宗大学の学監（学長）になり、この時期は、宗教家として最も充実した時期でもあった。

9　晩年の満之とその顕彰

明治35年（1902）、長男信一、続いて妻が死去、学長も辞任した。肺病も悪化し、西方寺に帰った。しかし、血を吐きながらも、絶筆「我が信念」を書き上げた。明治36年（1903）4月には三男も死去、6月6日未明に「（言うことは）何もない」と絶えた。

悲惨極まりない40年であったが、蒼然たる如来慈光の春に包まれ、その人生を生ききった。

暁烏は、石川県の自坊明達寺に臘扇堂を建てた。西方寺には「信ずるは力なり」の記念碑と記念館も建てられた。毎年、西方寺で臘扇忌が営まれている。

◆もっと知りたいなら

- 『信念の人清沢満之』（昭63 山崎正広）
- 『清沢満之・生涯と思想』（平16 東本願寺）
- 『精神主義』（平16 藤田正勝）
- 『清沢先生』（昭25 暁烏敏）
- 『清沢先生の言行』（昭26 暁烏敏編）
- 『信念の人・清沢満之』（平7 季刊誌『みどり』山崎正広）

※清沢満之記念館に多数有り